

## ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡県立掛川西高等学校	氏名	多田遥花	学年	2年

探究の問い：ステレオタイプと上手く付き合い、静岡での異文化コミュニケーションをより活発にするには？

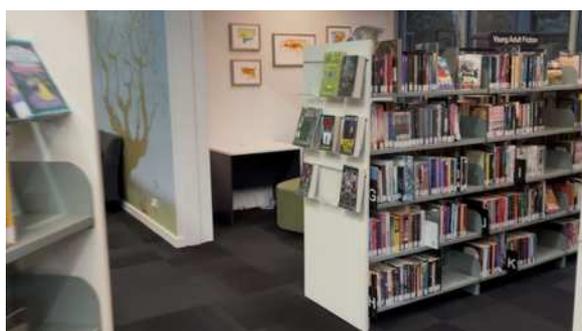
テーマ：外国人を受け入れるための「多文化共生意識」を静岡に広める

### ○探究の問い・テーマ設定の背景/留学の目的

静岡県は、日本国内でも外国人人口が多く、民間・公的機関ともに多文化共生を推進するための様々な取り組みが行われている地域である。しかし、こうした取り組みが進められている一方で、意識の面では課題が残っている。静岡県が実施した静岡県内在住の外国人および日本人を対象とした多文化共生意識調査の結果によると、「地域に暮らす日本人に親しみを感じる」とした外国人は7割を超えている。一方で、「地域に暮らす外国人に親しみを感じる」とした日本人は5割弱にとどまっている。このことから、日本人と外国人の間には、互いに抱いている親しみの意識に差が生じていることがわかる。私は、このギャップの要因の一つとして、日本人が無意識に抱いているステレオタイプが影響しているのではないかと推察した。そこで、このギャップの解消にステレオタイプ抑制が有効であると仮説を立て、ステレオタイプと多文化共生の関わりについて探究することにした。加えて、異文化交流を円滑に行うために必要な素質である異文化理解力を備えた人々が、どのような意識を持って外国人と接しているのかを推察することで、異文化と接する際に求められる姿勢について、自らの答えを導き出すことを目的とする。

### ○現地での探究活動

留学中、平日は語学学校に通い、休み時間や放課後の時間を使って教師や生徒を対象にインタビュー調査を実施した。主に、外国人に対して抱くステレオタイプの有無や、異文化と向き合う際にどんな心構えでいるのかについてインタビューし、異文化に関する意識を調べた。また、ホストファミリーに、外国人を家に迎え入れる際の関わり方や対話においての注意点について質問し、異文化理解に必要な視点を探った。



### ○調査結果

インタビュー結果から、海外旅行を趣味としている、留学経験がある、身近に外国人がいるなど、異文化接触経験が多い人ほど、異文化理解力が高く、異文化交流に積極的である傾向が見られた。その一方、異文化接触経験が多いにもかかわらず、外国人に対するステレオタイプから脱却できていない人も多数見られた。しかし、抱いているステレオタイプはポジティブなものが多く（日本人は礼儀正しい、フランス人はおしゃれなど）、ステレオタイプを抱いていても異文化理解には意欲的であるケースが多かった。また、異文化理解力が高い人の考え方として、異文化間で起きた摩擦やトラブルを否定的に捉えるのではなく、文化的な違いとして解釈していることがわかった。

### ○考察

異文化に接触する経験が異文化理解力を養うのは、交流の中で感じる不安や違和感と向き合う経験を重ねることで、各個人の異文化との向き合い方が構築されていくためではないかと考えた。また、実際に外国人と対話することで、自身が抱いていたステレオタイプへの意識が修正され、外国人を一般的なイメージではなく、個人として認識できるようになる点も、異文化の受け入れが容易になる理由だと考えた。加えて、調査では、ステレオタイプから脱却していても異文化理解に積極的な人々が見られた。これらの人々は、ステレオタイプの存在を認知しつつも、実際に相手と対面した際は、相手を一個人として考え、一般的なイメージとは切り離して関わっていたのではないかと考えられる。ステレオタイプを完全に払拭することができなくても、実際の対人場面で相手を一個人として捉え、先入観にとらわれずに関わろうとする姿勢があれば、異文化理解は十分に促進される可能性がある。

### ○最後に

この事業を通して、留学中の学びに加え、準備や振り返りの過程でも多くの経験や成果を得ることができた。書類やプレゼンテーションの制作、事前・事後研修への参加、課題への取り組み、そして現在執筆している本報告書の作成などを通して、自身の考えを言語化し、他者に伝える経験を多く積むことができた。その過程で多くの困難はあったが、それらを乗り越える中で、自身の課題発見力や発信力を見直し、成長させる貴重な機会となった。今後は本事業で得た視点を大切に、本留学を支えてくださったすべての方々に感謝して、異なる文化を持つ人々と向き合う姿勢を忘れずに過ごしていきたい。

